昭和62年度(第７回)事務担当者研修会における

講　演　要　旨

講　師　日本学術振興会理事長　木　田　　宏

期日　昭和62年７月１日(水)

場所　日　本　青　年　館

財団法人　スポーツ安全協会

私の今の仕事はスポーツ安全協会には余り関係がありません。しかし、ご紹介頂いたようにこの協会を創る時に担当局長（文部省体育局長）として一生懸命力を入れました。

今ここに東京海上の方がいらっしゃいますが、当時、私どもの担当をして折衝相手になっておられたのが、現在の東京海上の会長の渡辺文夫さんでございました。

この折衝に当っては私どもかなりきつい事を申し上げて、これは非常に大事なことなのですから、ぜひ東京海上で努力してくださいとお願いしました。この前久し振りにお会いした時に、あの時は大部怒られたと会長から言われたが、どうも１６，７年も前の話ですから若気の至りで恐縮なことであったと思います。今日は、どうしてこういうものを創ったかということを色々とお骨折り頂いている皆様にお話したいという気持で出てまいりました。私が体育局を担当しましたのは、昭和４４～５年ですが、その頃世界的にもスポーツの市民活動をいかにして普及するかということがかなり大きな話題になっておりました。オリンピックが終った後で、体育局の仕事を担当してみますと、日本のスポーツはトップダウンの性格があると思いました。オリンピック委員会があり、体育協会があって、上から下へ事柄を下ろしていくのです。国体は賑かにやっているのですが、知事が先頭に立って集まって賑々しくやっています。それもトップダウンで、末端へ行くとみんな上からの補助金だとか何とかいうことにつられて動いているだけのようにも見えました。末端の組織は、市町村長１人という極端な姿まであるといわれたのです。

一方、どこでスポーツが行われているかと言うと、それは学校と会社であります。そして、だんだん今日のような様相が見えていましたが、しかし当時はテニスクラブが活発になるとか、あるいはスキーや水泳がブームになる

とかいうようなことはなかったのです。

当時、体育協会は、アマスポーツとか何とかいって堅いことを言っていました。プロをスポーツと認めないようなことを言うわけです。しかし、素直に日本の市民生活の中のスポーツがどこで一番普及しているかというと柔剣道です。

戦後アメリカ占領軍が来て、柔剣道は国粋主義だからやってはいけないと言われ、学校から追放されました。その結果どこで伸びてきたかというと、柔剣道の人達が一生懸命、今日で言う塾ですが、これを広げて市民や子供たちが支えるという少年剣道連盟が、それぞれ各地に出来ていたのです。そういう新しい動きが少しずつ見えてきていました。

橋爪さんとか、古橋さんが初めて戦後日米対抗戦等で大いに活躍しました。こういう人達が自分でプールを持って指導を始めると、プロになってしまってアマの世界から離れるというのですが、これもおかしなことで、私自身は余りスポーツに関係がなかったものですから、かえってよかったのかもしれませんが、横から見ると日本のスポーツ界はおかしいことになっていたと思いました。

こうした一方では、丁度オリンピックの後で、層が薄い、もう少し層を厚くするよう努力しなければならないと反省し、競技で弱いのは市民運動の中にスポーツ熱が充分に浸透していないからだといっている。今でも同じ様に中学校で国体に出すの出さないのというようなことを言っていますけれど、当時から水泳などは、小学校の頃から特別に鍛えなければいけないのだといわれていました。それなのに学校はむずかしいことをいうと言うわけです。その当時、水泳選手がどこから出てきたかと言うと、市民プール、いわゆる今日の塾の中から出てきたのです。

実は、その頃冬季オリンピックを日本（札幌）へ持って来ようとしていました。オリンピック組織委員会がアムステルダムで開かれたとき、体育局長として一緒に行って、日本への誘致を行いましたが、当時西ドイツでは、ゴールデンプラン「第２の道」という運動が行われていました。これは学校が第１の道で、そして第２の道というのがスポーツの道なのです。そのドイツでは、一体どういうスポーツ活動になっているのかと聞いてみたところ、まさにボトムアップなのです。地域ごとにスポーツクラブがあって、そこからクラブメンバーがだんだん大きくなって地域の体育組織を支え、それが全国のスポーツ組織を支えオリンピック委員会とつながっているのです。スポーツというものを考えるならば私は、そういうふうでなければならないと思うのです。上から号令をかけて下へおろして行事が終ったら後は市町村の国体の単位としては、市町村長１人残っているだけというようなことでは、スポーツは振興できません。

そこで、いかにして市民の中にウゴめいているスポーツの意欲というものを振興させていくか、まずそれを考えなければならないのです。日本のスポーツ界もそうでしたし、社会教育もそうでしたが、団体活動を行う時にお金は上から来ると思っているのです。政界と同じで派閥をつくったらお金を集めて、その金で会員を集めるようなものです。もちろんそうでない組織もあります。それは宗教団体です。指導者も多いけれども熱心な賛同者がいて、盛り上げている。そういう点から見て宗教団体というのは、すさまじいものだと思います。いろいろな社会活動を、教化活動もやるし、スポーツ活動もして、お金は全部お賽銭として下から上って行く。上から信者にお金を配ってはいないのです。

ドイツのスポーツ団体というのは、宗教団体のようにお金は自分達が出し

てリーダーと一緒になって健康を増進するということでやっているのです。そういう面でみていますと日本でも当時だんだんゴルフが流行になっていましたが、大金がかかるのでは日常の市民生活のスポーツにはなりません。又、その頃から少しずつスポーツクラブというものが流行し出しました。今日ではあっちこっちにいっぱいできたようですが、中小企業のお忙しい社長さん方が時々利用する。ホテルのプールで泳ぐというのです。私は、八田さんがつくられたのでしたか、新宿の方にスポーツ会館というのができたころ、まいりまして、なるほどこういうふうに、スポーツというのは必要な人が若干のお金を出してやるものかと思ったわけです。本当に自分でスポーツを考え、健康を考えるような人は特に中小企業のおやじさんのように忙しい人は、そういうところに会費を払って指導者をつけて練習しているのです。

自然発生的にはそうなるかもしれないが、行政の施策として考える時には、そういうことでなく、もう少し手軽に集まれるようにしなければなりません。当時、一体何がスポーツをする団体活動の障害になっているのかと聞いてみました。学校の先生は子供を山へ連れて行こうとしない。海に水泳にも連れて行こうとしない、どうしてだろうか、それはけがをしたら責任を追及されるばかりで、補償のしようがない。その頃、学校安全会というのができましたけれども、その補償額は３００万円位でその位ではどうしようもなかったのです。そこで「思い切って子供たちを遊ばせろ」とか「指導しろ」とか言われても、学校の先生は逃げてしまう。それでは市民に必要なスポーツを盛んにすることはできません。

当時私は次のように考えました。当時は国民の皆んながだんだん豊かになりつつあったし、さらに豊かになるであろう。そうなるとお金と時間も出てくる。飲み食いが唯一の楽しみという時は過ぎて、次第に、自分の健康なり、本当

の仲間をスポーツを通じて一緒につくるという仲間つくりの楽しさというものを、日常生活の中に求めるようになる。そこを基盤にして国民のスポーツというものが広がってくる。

そこで県の課長さん方に「君の所の県の中でどの位スポーツをやっているクラブがあるか教えてくれ」と言ったところ、誰も知らないのです。自分のところへ補助金を取りにくる団体とはつき合っていましたが、市民のスポーツ活動にはつき合っていなかった。こういうことでは将来が開けない。どうしたら、市民の中に仲間をつくって運動をする、あるいは暇のできたいろいろな人達が仲間をつくって、短歌，俳句だけでなく、体をつくるようになるか、そういう動きを教育委員会の体育関係者が奨励していくようにしないと、これからの体育行政ではないと思います。

ところで行政側の方から呼びかけるとき、市民の方はどういう対応を示すかが問題です。「それでは　どの位お金をくれますか」という声が出る。お金がもらえたら、人の為にスポーツをやってやるというように聞えます。しかしお金がもらえたら、人の為にスポーツをやってやるようなことをいう者を相手にする必要はないのです。むしろ自分達で自分のことを考えようとしている人達を、行政の立場の人は追いかけて、手助けしてやるという方向へ体育行政を変えなければならないのです。国体の選手強化ということだけで終らせてはいけません。

そこで、私は２つのことを考えました。団体をつくり、リーダーを呼んで何かをやろうとすると事故が起こった時にリーダーが責任を問われる。これを何とか解消してやらなければならない。それから自分でスポーツをやろうという人を行政当局は把握していない。この姿勢も変えなければならない。そしてスポーツ団体が本当に健全な自主的な団体になるならば、自分達の中

から上納金が上ってきて、下から上の組織を動かすようになる。こういうふうに流れを変えることによって、生活の中における市民スポーツというのが広がるに違いない。

まず、指導者に対して、「責任逃れをする必要はありません。これで十分保障してあげます。」といえるように保険のシステムをそのグループで使える様にしようと考えました。火災保険は大分普及してきました。自動車が普及するにつれて自動車保険は、これは強制保険であるから広がった。しかし自分が自分で運動してけがをした時にどうするかというと、自分の責任で保険をかけてやるのが一番いいのではなかろうか。だからそういう特別の保険をつくってもらう。しかし、保険に目的があるのではないのです。私は、グループをつくってそこで指導者が安心して指導ができるようにすることに一番の眼目を置いたのです。

特に、ねらいは学校にも置いたのです。今の保険では「学校管理下」は不担保という変なことになっていて私は大変不満なのです。こちらで保険をかけてグループ活動を奨励しようとするのに、学校の中のことは別だなどと言う必要はなく、学校の中であろうと、外であろうと事故について学校安全会からの補償があるなしに拘らず、こちらの保険から補償が行われて悪いはずがありません。こちらは自分で金を出して保険をかけているのですから両方から補償が出てもおかしくない。自分で金を出して保険をかけたものを学校安全会の補償があるから、こちらの保険から補償を出してはいけないということをいつの間にそうなったのか創設者としては残念でなりません。自己責任を確立してやるというのでしたら学校の色んな学習活動の中に保険を自分でかけて一向に悪いことではないんです。自分で傷害保険や生命保険をかけているとき、学校の中で死んでも安全会の補償があるから、お前の生命保険の金を請求し

てはいけないなんてそんなばかなことを言う人はいない。ところがいつの間にかスポーツ安全保険については、そういうおかしいことになっいる。これは皆さんに言うことではないのですが、文部省当局の側で考えてもらいたいのです。そのようにして自分のことについて自己責任を持って、そして指導者になってくれた人の責任だけを事故の時に追求することはやめるようにしたい。みんな思い切って健康を考えたらいい。どうしても事故というものは起こります。事故が恐しいからと言って、夏の水泳教室も止め、夏の登山も止める、ということをしていいでしょうか、本来この保険をつくったときの主旨はこういうことでした。

この保険制度を始めたとき、各県の課長さん方にデーターを集めてもらいました。嬉しかったのはその中に「老いらく山岳会」という様なグループがあったことです。そのときに作ったと言っていました。従来、そういうものを県のスポーツ関係者はつかんでいなかったのです。しかし、皆さん方の手を通してこういうものができたので安心して保険をかけてみんなでスポーツをやりましょう、と言ったところ幾つもの団体がそういうふうに出てきたのです。こういう団体を把握してその活動に必要な支援の努力を重ねていく、また、そういう人達の色んな横の集まりの連絡を緊密にしてあげる。これがスポーツ振興の一番の基礎になるのです。

私はその場合、実は保険料を集めてほしくなかった。むしろ会費をとってほしかった。会費の中で何がしかの保険料を出す。しかし、集めた会費で自分達のスポーツ活動を活発にするということを考えなさい、と言いたかったのです。けれども、なかなかその習慣が出なかったのです。団体をつくり、団体をつないでいるのが、この保険料だけです。これでは寂しいことです。そして飲み食いに行く時は仲間で気前よくのんでいるのです。それなら、自分